

偽書について①

『信長公記』首巻と『史疑徳川家康事蹟』

二階堂 玲太

1 『信長公記』の首巻について

○「桶狭間山の戦い」の今日

桶狭間の戦いは一般に、織田信長軍が奇襲作戦により、今川義元軍を壊滅させた、とされていたが、かなり以前から奇襲作戦でなく、遭遇戦であるとされ、場所も桶狭間という窪地でなく、桶狭間山だとされている（小和田哲男）。

当時の沓掛から熱田までの東海道は、桶狭間山の戦いののちの慶長 13 年に造った道であるから、合戦当時はなかったという（『新編桶狭合戦記』）。だが、最近では、信長軍は中島から東海道沿いに南東へ進出し、桶狭間山に迫ったというから、やはり、東海道は存在したのか？ 幻の東海道である。

この幻の東海道には、『甲陽軍鑑』によれば武田信玄麾下の葛山氏元の兵 5 千がいたはずであるが、信長軍が進軍したときは乱取りの最中で、兵は東海道にいなかったそう。信長軍にとって、そんな都合良くいくはずがないから、信玄と信長は何らか密約をして、街道をがらんどろにしたのでは、という。なるほど、信玄は義元と同盟しているが、いくら同盟しているといえ、武田領に接している三河を義元に取りられてはたまらない。いつ同盟を破棄され、甲州を攻められるかわからないからだ。

また、桶狭間の古戦場も江戸時代の観光目的のため移動したので、当時の場所とは異なるという（榊原邦彦『桶廻間合戦研究』中日出版 2016 年）。

○八切止夫のこと

のっけから桶狭間は混乱状態であるが、激越な口調で「桶狭間の戦いはなかった」と主張したのは八切止夫である。彼が、「桶狭間の戦いはなかった」という発言をした理由は、太田牛一の『信長公記』の首巻への疑問でもあったといえよう。誰でもが不可解に思えるのは、首巻である。15 巻からなる『信長公記』に、牛一が晩年になって首巻をくわえたのである。『歴蔵「信長公記」の大研究』（新人物往来社「歴史読本」別冊付録 2007 年）は桐野作人氏と和田裕弘氏とが分担執筆した労作であるが、和田氏は、第二章「牛一本「信長公記」全容」で「信長公記一覧を示している。51 団体などが「信長公記」を所有しているが、そのうち首巻を含め全 16 巻を揃えているのは、陽明文庫と東京国立博物館であり、首巻を除く 15 巻を所有しているのは、10 団体である。あの建勲神社（明治 2 年（1869）、明治天皇の御下命により創建された織田信長公をお祀りする神社）すら、首巻を所有していない。その他は、1～12 巻しかない。

和田氏は、「15帖に比して首巻には年次の誤りが多く、その最たるものが永禄3年(1560)の桶狭間の合戦であり、永禄3年を天文21年(1552)と記している」と8年繰り上げて桶狭間の戦いが行われたことにしているのだ。八切氏は、この作為を取り上げ、「信長公記」と「太閤記」はリライトされなんともいいようのないものだと決めつけた。

彼は、もし桶狭間の戦いがあったとしたら、この戦いで活躍した家臣は出世したはずだが、「桶狭間合戦に参加したもので、高名になったり出世した者などは、現実にはただの一人もいない」と文献の調査結果を開陳した。それどころか、「不思議な話だが、信長の家臣団は、この合戦を転機にして入れ替わられたように替わっている」としている。

この意味する所は何であろうか？

何が、桶狭間であったのか？ 或いは、本当に桶狭間の戦いは幻であったのか？ 何とも奇妙な八切氏の論説ではないか。

2 なぜ、村岡素一郎著『史疑徳川家康事蹟』は排斥されたのか

明治35年に出版された本が、何者かに買い占められ、版元も再版しなかったので、長い間埋もれた本となって、戦後ある小説家が神田の古本屋のゾッキ本の中に偶然に見つけた。そして、その小説家・南條範夫の手により昭和の時代に甦った。それは、明治に排斥された本で、村岡素一郎著『史疑徳川家康事蹟』という本であった。

南條範夫は、正史に書かれた家康と異様ともいえる家康の出自の落差に驚愕した。その記述は、次のように要約される。

「のちの徳川家康は、松平家とは血筋上、なんの関係もなく、駿府の賤民の出身である。人質になっていた竹千代は、通説にいうのちの家康ではなくて、2歳のときに、ある日、こつ然と何者かに誘拐された。その誘拐した者こそ、世良田二郎三郎元信（のちの家康）と、その一党である。世良田元信は、のちに松平家の当主元康の死後、元康にいれ換わったのである。家康の妻といわれる築山殿は実は元康の未亡人で、その実子信康は世良田元信に誘拐された竹千代が成人した姿である……」（榛葉英治「家康をニセ者と断定した男」、「週刊文春」1963年4月5日号）

○家康は「^{はいのり}背乗」されたのだ。

世良田二郎三郎が無頼の徒を集め、松平家を襲撃し、当主が亡くなった幸いに、その妻と子を手中におさめた。松平元康の未亡人こそ今川義元の養女として、元康と結婚した瀬名姫（築山殿）であった。彼らの間には信康が生まれていた。世良田二郎三郎元信は、まんまと元康と摩り替わり、のちに松平元康から徳川家康と改名して天下を治めたのであった。

さらに敷衍すれば、家康は信長に命じられて、長男信康と妻築山殿を殺害したという、彼の歴史に汚点を残した、とされる。だが、村岡素一郎は、世良田二郎三郎こそ、摩り替わった松平元康（改名、徳川家康）なのだから、信康と築山殿は彼の子ではないから、そのような残虐なことが出来たのである、仮に、信長の命令でやむなく妻子を死に追いやったならば、菩提をきちんと弔ったはずである。素一郎が調査した所、信康と築山殿の墓は、野ざらし状態であり、江戸時代もかわらなかつ

た。そこには、家康の何の愛情も感じられない。なぜなのか？

では、それはいつの出来事であったろうか？ ここで、『信長公記』首巻の、永禄3年の桶狭間合戦を天文21年とした、太田牛一の作為を思い出すのだ。彼は、永禄3年の事件を読者に思いさせたくなかった？ 今川義元が桶狭間で横死したのち、家康は今川家のくびきから逃れ、一大名として独立した。そして、織田信長との連盟を模索した。正史では、そのように解釈されている。実は、摩り替わった、家康はホンモノの元康の顔を知っている部将が多い、今川家にはもう戻れなかったのだ。このことは、江戸初期においては、多くの人たちが知っていたのではないか。太田牛一はじっと彼らの多くが死ぬのを待った。そして老齢になり、自らの死期を悟った頃、首巻を書き始めた？

○だが、本当に二郎三郎は松平元康と摩り替わりのちに徳川家康と名乗ったのだろうか。その証明はどうしたら良いのか？

素一郎は、家康の生母於万の方と祖母源応尼を調べた。果たして、彼らの履歴は、家康（＝二郎三郎）の存在を窺わせるものであり、高貴の方であるべき彼らは、実は駿河の賤民であることを突き止めた。

「(家康)公は駿府の宮の前(伝馬町)に誕生し、その幼児は、この近くの華陽院境内に住んでいたことを確かめた。公の生父は、江田某であり、公の生母は名を於大と呼び、ささら者の娘で、その母……すなわち公の祖母は、名を於万と呼び、また源応尼と称した」(『史疑徳川家康事蹟』、『史疑徳川家康』) 元康の妻子の最期は、悲惨な出来事であった、家康は信康を思い出しては涙を流した、と伝えられるが、それにしても彼らの弔い方は天下を獲った徳川家とは思えない冷淡さであることは先に述べた。

○素一郎は、徳川家の系譜を追って、駿河に住んだ

そして、家康は実は二郎三郎が摩り替わったのだと主張した。それは驚天動地の説であった。だが、素一郎の『史疑徳川家康事蹟』を何者かが買い占めて、書店に並ばなくなった。出版元の民友社は、徳富蘇峰が社長になっていたもので、彼は「……家康は、家康である。新田義重の後と言うたどて、別段、名誉でなく、また、乞食坊主の子孫だと言うたどて、別段恥辱でもない」(『近世日本国民史』)と、家康の出自が何であろうと、家康が偉大であったことには変わらないとしていた。ところが、『史疑』が書店から消えても、民友社は再版をしなかった。『史疑』は、絶版となった。何者かが民友社に再版をしないように説得したのだ。

なぜか？ 「民友社社長の徳富蘇峰は貴族院入りを望んでいたといわれる」からだ。

○だが、蘇峰は素一郎がただたんに徳川家の血筋を問題にしていたのではない、ということに気づけなかったのだろうか？

素一郎は賤民が摩り替わって家康になったのに嘆いたわけではない。むしろ、そのような状態は、彼の望むところであった。彼の主張は、明治国家論(藩閥政府批判)として、維新の生き残り、賤民出の伊藤博文や山県有朋を攻撃することにあつた(磯川全次著『史疑幻の家康論』)。「近代日本

人を支配した思想は進歩主義であり、武士階級出身の藩閥政治家の功績を認めない風潮があった」（梅原猛）いわゆる明治時代の薩長藩閥政治の批判は、当時の知識人の多くがもっていた。ともすれば藩閥政治を容認するかに見える福沢諭吉の論説に反論する土佐の植木枝盛^{えもり}などの自由主義者が多かった。維新になっても陽の当たらぬ場所に置かれた、土佐者にはその傾向が強い。

特に官職を点々としながら恵まれず、北海道に渡り、元会津藩士の娘を妻にし、会津の惨状を知った素一郎は、伊藤や山県の政事に意義申し立てしようとしたのだ。それをかぎ取った向きが、『史疑』を買い占め、再版を阻止したのではなかろうか。ただたんに徳川家が買い占めたというのは、多少的がはずれているのではないか？

素一郎は、駿河で家康替え玉説の講演をした。「明治28年以前、村岡は「家康の出身についての絵研究」という講演を行った。

家康の本拠地で、家康の出自についての定説を覆そうというのであるから大胆である。

講演後のある日、村岡の自宅に抜刀した剣客数名が押しかけた。もと新番組隊頭、中条金之助らであったという」（礪川全次『史疑幻の家康論』）

中条金之助は、駿河牧之原で茶の栽培をしている元徳川武士のひとりであった。近くには油田の発掘をしている徳川縁故の者もいる。いわば徳川家の巣窟のようなところで、家康を貶めるようなことをするには命知らずにもほどがあった。素一郎は剛の者で、その情熱は激しい。

彼を動かしているのは、本当は家康の出自のことでなく貴賤交替論であった。

「歴史は繰り返す。そのサイクルは約300年である。300年ごとに貴と賤が入れ替わる、これが自然法である。ただし、皇室はこの転変から超越している」（『史疑幻の家康論』）300年前に家康が貴賤交替した。ならば、明治維新で再び貴賤交替するのは自然であった。そこまでは良い。

素一郎が「皇室はこの転変から超越している」と断じたとき、虎の尾を踏んでしまったのだ。長い間、論議されていた、「南北朝正閏論」が明治44年になって、北朝であるはずの明治天皇が自ら、「南朝が正当である」との御聖断が下った。世間は震撼していた。もし、素一郎の発言が「南北朝正閏論」の延長線上にあったとしたならば、ある筋には、たとえ皇室はこの転変から超越していると言っても、それは免罪符にならない、危険な思想であったに違いない。

かくて見えない奥の院が動いた。『史疑』は密かに買い占められ、再版されなかった。それは、徳川家のみの仕業ではなかったに違いない。